【資料 9】

男女群島生物群集保護林現地確認報告（概要）

1　男女群島の概要

男女群島は、五島列島福江島の南西７０km離れた東シナ海上にある島嶼群で男（お）島、苦路岐（くろき）島、寄（より）島、花栗（はなくり）島、女（め）島の主要５島からなる。かつては、女島灯台に職員が常駐していたが、現在は、太陽光発電により自動化され、無人となっている。各島の地質は、石英・角閃石含有複輝安山岩質溶結凝灰岩（通称、男女溶結凝灰岩）からなり、いずれの島の海岸線も急峻な断崖絶壁で、岸から垂直に立つ露岩や柱状、平行、斜行等の節理構造や、大きく崩落した岩塊等で囲まれ、容易に近づくことはできない（写真、１、２、３、４、５、６、７、８）。

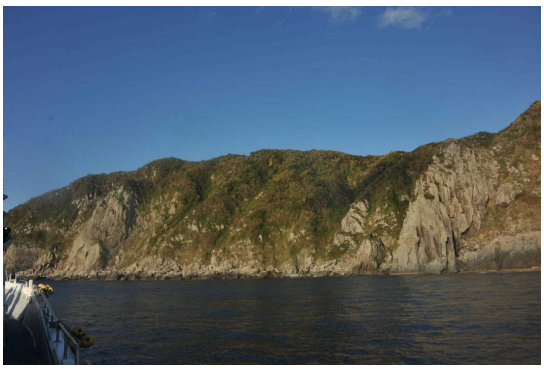


写真１　男島海岸線の露岩

写真２　大きな岩塊で残る露岩

写真３　女島灯台施設

写真４　太陽光発電設備

写真５　灯台手前ヘリポート

写真６　立入禁止看板（中国語、ハングル）

写真７　女島灯台手前からの遠望（奥は男島）

写真８　女島最南端の柱状節理

島の植生は対馬暖流の影響を受け、モクタチバナ、タブノキ、ヤブニッケイ、ショウベンノキなどの暖帯性常緑広葉樹やビロウ、アコウ、オオタニワタリ、クワズイモ等亜熱帯系植物が混生する。また、ダンジョヒバカリに代表される地域固有の動物の生息や海鳥オオミズナギドリの重要な繁殖地とされているなど、原始性が保たれた貴重な島嶼型生態系となっている。

２　過去の調査、現地確認の経緯

男女群島は絶海の孤島のアクセス困難地のため、学術的調査資料は比較的少ないが、過去何度か、植生調査や動物調査等学術調査、文化財調査が行われていた。

また、女島灯台施設関連を除き全島が国有林であり、その特異な地勢や気象条件、貴重な動植物が生育する等の自然環境があることから、全域を生物群集保護林に設定している。所管する長崎森林管理署では、年１回委託調査者による巡視により、現況把握をしている（各島に船で接近し、定められた定点ポイントからの写真撮影とともに、　唯一桟橋のある女島への上陸、女島灯台までの周囲巡視などが行われている）。

しかし、署職員は、荒天の場合同行困難なこともある。

保護林モニタリング調査は、森林構造の本格的な基礎調査であり、平成２１年、２２年に続けて現地調査が行われ、直近では平成３０年にも調査が行われた。

既述のように、地理的、気象条件制約の関係で、チャーター船同乗のチャンスは少ないが、今回、天候に恵まれ同行の機会に恵まれた。時間的制約はあったが、船上からの各島周囲確認、女島へ上陸、同保護林の直接の現況把握が出来た。（写真９、１０）

以下、その概要を報告する。

写真９　巡視の様子

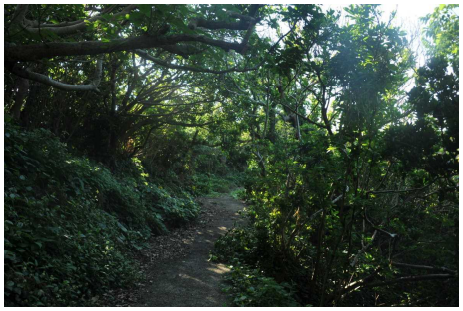


写真１０　灯台までのアクセス道

３　調査日程等

令和２年１１月１２日　AM　５：３０頃　福江港出港

男女群島に入るためには、潮の干満を見て早朝出港となるため、福江島に前泊し、現地に上陸できるタイミングで福江港出港、女島を離岸可能なタイミングで戻りとなり、限られた滞在時間での踏査である。

委託業者のチャーター船（写真１１）はかなり高速であるが、それでも往復６～７時間程度の所要時間がかかり、群島に近づき、最初に見える男島から東側海岸線沿いを距離を保ちながら、島伝いに徐々に南下、東側～南面の外観を観察し、目的地の女島に上陸した。（写真１２）

現地調査時間は、正味１時間３０分程度の短時間の上陸であった。

写真１１　高速のチャーター船

写真１２　コンクリート桟橋

８：４０　上陸

女島灯台アクセス道を往復し、道沿いに植生等を観察

１０：０５　離岸

帰路は時計回りで、行きとは反対側の各島の西側～北斜面の外観を遠望、観察した。

福江港帰港　　１３：３０頃

この日は、近年にない穏やかな波高であったとのことであるが、それでも船内は大きく揺れるため、食事は取らず福江港に戻ってからの遅い昼食となった。

４　現地確認参加者

九州森林管理局　計画課　経営計画官　岩下　治喜

行政専門員　樋口　浩

長崎森林管理署　　係員　　中越　隆太郎

局署関係　計３名

環境省　九州地方環境事務所　五島自然保護官事務所　自然保護官　半田　浩志※

現地確認の業務委託者（受託会社３名、及び瀬渡船船長１名　計４名）

計８名

※環境省はオブザーバー参加（局・署と九州地方環境事務所間で調整し、環境省の現地出先機関、五島自然保護官事務所と連携を図ったもの。）

５　調査報告概要

当日のみの限られた調査日程であり、多くを見ることは出来なかったが、既往の報告書を参考に、以下の①～③の観点に加え、海岸線沖からの遠望と女島灯台までの往復の間、周辺の植生生育状況等を確認した。

なお、写真撮影した植物種は、過去の調査結果、植物図鑑等を照らし合わせ、分かる範囲で確認した。

＜現況把握の視点＞

①男女群島の植生の現況（女島灯台までのアクセス道周辺）及び遠望による観察

②ネコの生息の痕跡、固有種

③最近の人為的影響の痕跡など、異常の有無

ア　植生

植生については、女島のコンクリート桟橋から灯台まで伸びる歩道沿いを歩いて確認した。以下、確認した植物種を列記する。

ビロウ（船上から遠望）、ハチジョウススキ、オニヤブソテツ、カワラヨモギ、タイトゴメ、ハマダイコン、ツルソバ、イヌビワ、オオイタビ、ハスノハカズラ、マサキ、ソテツ、モクタチバナ、クワノハエノキ、アコウ、ツワブキ、ハマウド、ノイバラ、ハマヒサカキ、サツマサンキライ、クワズイモ、エビヅル、マルバグミ、クサギ、タブ、カラムシ。（順不同）別添、写真参照）

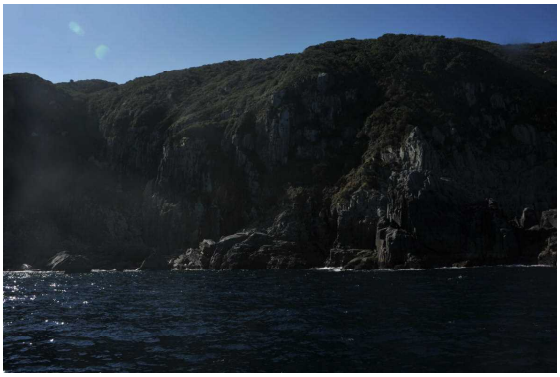
このうち、モクタチバナは過去の報告書にもあるとおり、この女島（諸島群）、男島の主要高木種であり、大きな群落をなしている。しかし、島全体の木本類も同様であるが、常時強風にさらされるためと、土壌層の厚さが限られるためか、樹高はそれほど高くなく、いずれもせいぜい５－６ m 程度で、風が弱いところで７－８ m といったところと思われる。女島の北部、最も大きな男島の上部には、緩傾斜から平坦な箇所が拡がる山頂部があり、そこまで行けば更に樹高の高いものもあると思われる。

遠望した男島では、山頂付近にビロウが散らばって生育しているのが確認されており、これは、おそらく男島山頂部に比較的平坦な地形が拡がっているため、土壌が発達し、部分的にビロウに適する土壌環境ができたものと考えられる。平成２１年、２２年モニタリング調査報告書では、この男島頂上部の平坦地にタブ林が成立していることが確認されており、そのことからも推し量られる。

一方、海岸に近くは、急傾斜地の崖に囲まれ、強風、潮害の影響を強く受けるため、土壌形成は発達せず、貧弱な薄い表土になる結果、高木林が成立しないと思われる。

また、植生分布図でタブノキ林は男島と女島北部に限られていたが、女島南部の灯台手前（標高約１００ m 付近）まで上って尾根沿いに進むと、わずかに１０ m に満たない程度であるが、小さな森林が群落状にできており、この中にタブが狭い範囲で複数個生育するのを確認できた。この辺りは、女島南部の中では、高標高地点であるが、通常海岸近くにある亜熱帯性植物のアコウ、群落状クワズイモがタブと混生して生育しているのが見られた。以下、主に灯台アクセス道沿いで確認した植生写真を掲載する。

男島山頂部（東南側）のビロウ



男島の西北側にビロウは見当たらない

ハチジョウススキ

風衝樹形のハマヒサカキ

ソテツ（海風に当たり葉先枯れが目立つ）

カラムシ

ハマウド

クワノハエノキ

イヌビワ

モクタチバナの群落

ツワブキ

エビヅル

アコウ

タブ

マルバグミ

マサキ

クサギ

クワズイモ

サツマサンキライ

タイトゴメ

カワラヨモギ

イ　動物

灯台までの歩道沿いの比較的海岸に近いところで、ダンジョマイマイ？の抜け殻を各所で確認した。

前回調査（３０年度モニタリング調査）時点で確認されていたノネコの姿、糞等痕跡は、今回は確認できなかった。しかし、コンクリート桟橋表面でネコの足跡が確認でき、工事着工時(時期は不明)にはすでに生息しており、普段から海岸付近を活動の場としていたものと思われる。ノネコが、現在も生存しているかは不明である。そのほかの外来種の生息状況や影響については、確認できなかった。

海鳥オオミズナギドリの繁殖地とされるが、今回の現地調査では確認できなかった。男女群島に近づく際、複数のハシブトガラスの飛翔を確認し、帰路の船上からは、西側、北側周辺にて、カツオドリ２０羽程度が男島沖合で群舞するのが見られた。

カツオドリ

カツオドリ群舞

アトリ

ハシブトガラス

ダンジョマイマイ？の抜け殻

ネコの足跡（桟橋）

ウ　その他

海岸周辺は、漁のウキ、草履ほか、中国等からと思われる漂流物が多数流れ着いている。女島の周辺岩礁では、釣り客と思われる者が複数上陸しているのが散見され、その周囲には、釣り客を運んだと思われる瀬渡船が複数待機しているのが見られた。

女島上陸時点では、桟橋から灯台までは、特段侵入等の痕跡は見られなかった。

漂着ゴミの様子